

2023 年度 (評価対象年度 : 2022 年度)

新潟薬科大学応用生命科学部

外部評価報告書

2024 年 2 月

新潟薬科大学応用生命科学部

外部評価委員会

外部評価委員会委員名簿

(区分内、五十音順)

氏名	所属及び職名
◎ 門脇 基二	新潟工科大学 前副学長/名誉教授 新潟大学 名誉教授
浅野 和男	株式会社ブルボン 常務取締役執行役員
眞島 操	新潟大学社会連携推進機構産学イノベーション推進部門 産学官連携リサーチ・コーディネーター

◎：委員長

外部評価実施のプロセス

2023年10月3日 ～11月6日	各委員は「2023年度部局自己点検・評価報告書(評価対象年度：2022年度)」を基に書面にて評価を行い、評価項目毎に評価及び提言等を記載した「外部評価コメントシート」を作成し、委員長へ提出
2023年11月15日	各委員から提出された評価をとりまとめ、質問事項に対する大学からのコメントを付した「外部評価コメントシート」を作成 委員長確認後、各委員にメール配信し情報共有
2023年11月25日	2023年度新潟薬科大学応用生命科学部外部評価会議の開催
2023年11月26日 ～2024年1月19日	各委員から提出された「外部評価コメントシート」、外部評価会議における協議等に基づき、委員長は「外部評価報告書(案)」を作成
2024年1月20日 ～2024年1月31日	各委員は「外部評価報告書(案)」を確認し、意見を委員長へ提出
2024年2月2日	委員長は「外部評価報告書」を確定し、応用生命科学部長へ提出
2024年3月6日	応用生命科学部長から学長(運営会議)に提出

総合評価の基準

2022年度(評価対象年度)の各項目における評定は、以下のSからCの4段階評定とした。

S	高い水準で取り組み、卓越した成果があがっている。または特筆すべき取り組みを行っている。
A	適切な取り組みがなされ、成果があがっている、または近く確実な成果が見込まれる。
B	積極的な取り組みがなされているが、十分な成果には至っていない。
C	ほとんど取り組みがなされておらず、成果があがっていない。

総 評

新潟薬科大学応用生命科学部、大学院応用生命科学研究科による自己評価、外部評価委員による外部評価結果を一覧表で示した。

応用生命科学部

項目	自己評価 評定	外部評価 委員Ⅰ	外部評価 委員Ⅱ	外部評価 委員Ⅲ
I. 教育活動について				
I-1. 学生の受入れについて				
(1) 広報活動について	B	B	B	B
(2) 入学者選抜・入学試験結果について	B	B	B	B
(3) 新入学生の状況について	A	A	A	A
I-2. 学習成果について				
(1) 教育課程の編成・実施について	A	A	A	A
(2) 学修成果について	A	B	A	A
(3) 授業運営について	A	A	A	A
I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について(学部、研究科共通)				
(1) 学生修学・生活支援について	A	B	A	A
(2) キャリア支援について	S	S	S	S
I-4. AP、GP、DP、3方針の整合性について	B	A	B	B
II. 研究活動について(学部、研究科共通)				
A				
III. 社会連携・社会貢献活動について(学部、研究科共通)				
III-1. 国際交流について				
	B	B	B	B
III-2. 高大連携について				
	A	A	A	S
III-3. 地域連携について				
	S	A	S	A
IV. 教員・教員組織について				
IV-1. 教員組織について				
	B	B	B	B
IV-2. FD活動について(学部、研究科共通)				
	B	B	B	B
V. 定員・学費の適切性について				
	B	B	B	B

大学院応用生命科学研究科

項目	自己評価 評定	外部評価 委員Ⅰ	外部評価 委員Ⅱ	外部評価 委員Ⅲ
I. 教育活動について				
I-1. 学生の受入れについて				
	A	A	A	A
I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について				
	A	A	A	A
I-3. AP、GP、DP、3方針の整合性について				
	B	B	B	B
II. 教員・教員組織について				
	B	B	B	B
III. 定員・学費の適切性について				
	B	B	B	B

新潟薬科大学での内部質保証に関する学内規程改正後の、初の外部評価として、今年度(評価対象：2022年度)は応用生命科学部について実施した。部局を対象としているため、大学としての外部評価でなされる「理念・目的」、「内部質保証」、「大学運営」、「財務」等の項目については今回対象としていない。上記一覧表のように、自己評価の評定と外部評価委員による評価は概ね一致する結果となった。以下、各項目についてまとめてみる。

- ・入学試験について

2023年度入学生から、学生の受け入れに関して生命産業ビジネス学科は入学定員数を修正(60→45)することにより、初めて入学定員を超えたのが顕著な成果であった。応用生命科学部についてはここ数年定員を充足しなかったが、今回はさらに2022年度入学者数を下回ってしまった。広報も本学部、特に応用生命科学部に関しては十分機能しなかったのではないかと懸念される。今後、大学全体の中での学部として独自の広報活動に傾注することが重要になる(後述)。

- ・教育活動について

学部の性質を考えると、新入生の入学時の化学の学力がかなり低いのが課題である。入学後のカリキュラムについては各コースともバランスよく配置されている。特に1年次にデータサイエンス入門が配置されているのが良い。今後社会から求められる「ビッグデータの活用」や「機械学習」などの学習も追加していただきたい。卒業時のアンケートでは、コロナ禍の終了もあつてか学生生活の満足度が高かったのが好ましい。学生のドロップアウト防止対策としてのアラートシステムは適切である。特に低学年での留年、休学、中退状況の改善が必要。これは財務状況にも良い上、大学としての教育の手厚さを示す好機である。

学生交流は近年、学生自身が消極的傾向にあることから、支援の取り組みも引き続きリードされたい。キャリア支援は大変充実しており、就職内定率が100%であるのは素晴らしい。なお、採用企業側からの意見として、女子と比べて男子の印象が薄いので、対策を希望する。

- ・研究活動について

科研費の採択状況は新規採択率33.3%、教員全体で46%という数字は悪くない。さらに、より大型の採択があると望ましい。また、貴学の中では応用生命科学部が外部との共同研究や産学連携活動の主軸であると思われるので、より活発に展開していただきたい。特許出願件数の増加も望まれる。

- ・社会連携・社会貢献活動について

国際交流は昨年まではコロナ禍で自粛状態であったので、今後の海外との学生交流再開に期待する。高大連携講座や研究系部活動支援事業は有効に機

能している。高校生へ貴学の魅力を伝えるのに極めて重要な取り組みなので、さらに工夫されたい。地域連携については大学全体としての戦略に基づくものであるが、特に応用生命科学部がリードしていくと良い。地元秋葉区との連携は大変活発になされていて素晴らしいが、全県にまたがるようなより広域的な活動も展開されると良い。また、個別の活動も良いが、学部として組織的に実施されると効果はより大きくなると思われる。

- ・ 教員・教員組織について

教員組織については、どこの私立大学でも大きな課題である。年齢構成などは時間をかけてバランスを考慮していく必要がある。女性教員数の増加は国からの要請もあり大事であるが、採用の際は十分な考慮が必要である。博士号取得者の少なさから候補者の無理な採用は教員の質の維持に影響しかねない。また、私立大学にあっても理系大学であることから教員の研究と教育のバランスが重要であり、過度な授業負担とならないよう配慮を願いたい。FD研修会の実施は大学として重要なので、参加しやすいように年間スケジュールなどの調整が重要である。

- ・ 定員・学費の適切性について

定員は、2023年度入学生から大きな変更をした生命産業ビジネス学科は良いが、応用生命科学科は慎重な検討が必要である。財務状況が許せば、定員を抑制した方がより健全な運営ができるが、大学としての分野間のバランスなど考慮が必要と思われる。学費は他大学と比べてもほぼ同等なので、適切と思われる。また、学生としては学費とともに生活費の負担が大きいので、学外アルバイトの斡旋や学内アルバイトの提供なども工夫してほしい。

- ・ 大学院応用生命科学研究科について

研究・開発系の企業では大学院卒業資格が大きなメリットであるが、学生自身はその状況をあまり理解していないようである（県内企業ではまだその恩恵が十分ではないかもしれないが）。学部生時代に就職支援と同様、大学院進学の動機づけをより積極的に、かつ低学年から与えることが肝要である。大学院生は大学の研究力を推進する原動力にもなり、ひいては社会貢献にもつながる。大きな財産となる。なお、博士後期課程は社会人の受け入れが妥当な方向性である。

貴学の2023年度入試は2学部の新設を含めて大きく改善され、昨年に比べて大幅に成功された。「医療・健康系総合大学」としての存在感が示された。薬学部の「薬剤師」と新たな看護学部での「看護師」、医療技術学部での「臨床検査技師」という明確な専門職業人養成のメリットが認知された。それに比べ、応用生命科学部は「生命科学を応用して社会の課題解決に貢献する人材」を育成するとやや曖昧な位置づけではある。しかしながら実際、貴学応用生命科学部は、新

潟県をはじめとする食品・バイオ系の人材育成に大変大きな貢献をされているので、自信を持って育成していただきたい。

定員未充足の問題は、ともすると大学の教育の現状が社会の人材育成ニーズに適合していないと見做されかねない。しかしながら現実には、ニーズに不適合というより、大学ブランドのヒエラルキーで上位を勝ち取れていない結果である。国公立 vs. 私立、首都圏 vs. 地方という比較で、学生が目が圧倒的に国公立大学に向いている、また首都圏大学に向いているという長年の大学ブランド志向が戦いを著しく苦戦させている。本来の教育の中身での競争をする前に、数段のハンディを負わされている。その中でなお、それに打ち勝つ実績が求められているのが現実であるが、今回の医療系2学部の追加による応用生命科学部の私立大学における同系学部を持つ大学との差別化として、「薬剤師、臨床検査技師、看護師を養成する医療系の他学部と同じキャンパスで学ぶことができる」大学は少ないので、このことを広報で活用されていくことを期待する。

以上、全体を総括すると、今年度貴学応用生命科学部は、学生の受け入れに関しては苦戦されているが、学生への学習指導及びキャリア支援活動に関してはレベルの高い対応と十分な成果が得られていると判断されるものである。

2024年2月

新潟薬科大学応用生命科学部 外部評価委員会

委員長 門脇 基二